

ヒューム『人性論』分析：「信念」について

2020年5月5日 宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

※ 引用される場合は、出典を明記して
くださるようお願いいたします。

本稿は、ヒューム著、土岐邦夫・小西嘉四郎訳『人性論』（中央公論社）における「信念」に関する分析である。

信念に関するヒュームの説明は、異なる問題が混同されていて、錯綜している面がある。そもそも信念の問題は、“印象⇒観念”という枠組み、あるいは観念の「勢いや活気」というもので一律に説明できるようなシンプルなものではないのである。ヒュームは様々な事例を持ち出し思考実験を行っている。しかしそれらの反例を出すことも可能であるし、彼の説明も成功しているとはいえない。

本稿では、ヒュームの説明を分析しながら、いったい「信念」とは何なのか、信念における「情念」（情動的感覚）の位置づけについて明らかにするものである。

なお、本文中の引用箇所は、すべて上記『人性論』からのものである。また、これまでに以下のレポートにおいて『人性論』の分析を行っているので、参考にさせていただければ幸いである。

ヒューム『人性論』分析：「関係」について

http://miya.aki.gs/miya/miya_report21.pdf

・・・抽象観念および言葉の意味、時間・空間、複雑観念、因果関係について

ヒューム『人性論』分析：記憶と想像の違いとは？

http://miya.aki.gs/miya/miya_report27.pdf

・・・記憶と想像との違いについて

<目次> ※()内はページ

- I. ヒュームの言う信念の“本性”とは？ (2)
- II. ヒュームの思考実験は何を明らかにするものなのか (4)
- III. 印象⇒観念の枠組みだけでは説明できない (6)
- IV. 観念の活気や情感・情念の強さだけでは説明できない (7)
- V. 情念は、因果推論の“影響”のみでなく、事実認識を導くものとしても現れる (9)

I. ヒュームの言う信念の“本性”とは？

ヒュームは、まず以下のように問うている。

私はやはり、信じないのと信じるのとの違いはどこにあるのか、と尋ねる。信、不信のどちらの場合でも、観念を思いいただくことは等しく可能であり、また必要でもあるからである。(ヒューム、60 ページ)

・・・例えば、「シーザーは変死ではなかった」「銀は鉛よりも溶けやすい」「水銀は金よりも重い」(ヒューム、59 ページ)といった“命題”について、“私は信じないけれども、彼の言う意味をはっきり理解し、彼とまったく同じ観念を作る”(ヒューム、59 ページ)とヒュームが説明するように、(本当に“同じ”観念かどうかの問題はさておき)事実と異なる誤った言語的説明に対しても、その説明がどういうことを表しているのか、具体的イメージとして抱くことはできるのである。

一方、「丸い三角」「平面で交わる平行線」「直線4本からなる三角形」のような“矛盾”する(言語)表現については、私たちはそのイメージを抱くことさえできない。想像することさえ出来ない。「不合理なものはいかなるものも理解され得ず、論証に反することを想像力が思いいただくのは不可能である」(ヒューム、59 ページ) というのはそういうことである。

しかし、豚が空を飛ぶとか論理的矛盾ではないが事実ではない事象に関しては、私たちはその情景を想像することができるのである。

因果性における推論、つまり事実に関する推論では、このような絶対的な必然性は起こり得ず、したがって想像は問題をどちらのほうにでも自由に思いいただける(ヒューム、59～60 ページ)

信、不信のどちらの場合でも、観念を思い抱くことは等しく可能であり、また必要でもある(ヒューム、60 ページ)

・・・その上で、「信じないのと信じるのとの違いはどこにあるのか」(ヒューム、60 ページ)とヒュームは問うている。そして、

ある特定の対象の観念をどうにかして変えようと思っても、できるのは観念の勢いと活気を増すか減らすかすることだけである。もしなにかこれと違う変化を観念に加えるなら、観念は別の対象、あるいは別の印象を表現することになるろう。(ヒューム、60 ページ)

ーム、60 ページ)

・・・ということになり、以下のような説明に導かれる。

信念はある対象を思いいだく仕方を変えるほかにはなにもしないのだから、観念に対して信念は勢いと活気とを付け加えて与えるだけである。したがって、所信もしくは信念は、最も正確には、「現在の印象と関係を持つ、すなわち連合する生き生きとした観念」と定義できるだろう。(ヒューム、61 ページ)

・・・それでは、信念とは観念を抱くときの“勢いと活気”という結論になるかと言えば・・・そういうわけでもない。

観念を思い抱くこの仕方を説明しようとするとき、ぴったり当てはまるどんな言葉も見当たらないので、心のこの作用を完全にわからせようと思えば、各人の感じに訴えるよりほかはない、同意される観念は、空想だけによって現れる虚構の観念とは違って感じられる。私が、よりまさった勢い、活気、固さ、確固さ、強固さ、などと呼んで説明しようとしているのは、この違った感じなのである。それでも、この漢字、この思いいだく仕方を完全に説明するのは不可能であると、私も実のところ認めている。(ヒューム、61 ページ)

さらに付け加えて、この「感じ」は、

勢いと活気といった名辞には、本来含まれ得ないような相違が、観念の間にある(ヒューム、62 ページ)

・・・というものであるらしい。

後述するが、ヒュームは印象⇒観念、という枠組みに固執するあまり、信念の問題における情念(より正確には情動的感覚)の位置づけを見誤ってしまったのである。ヒューム自身が迷っているように、観念の「勢いや活気」では説明できない問題なのである。

II. ヒュームの思考実験は何を明らかにするものなのか

ヒュームは、これまでの自らの議論をもとに、印象と関係を持つ観念に、「勢いと活気」（厳密にはその言葉では表現しきれない「感じ」であるはずだが・・・）を与える“原因”を探ろうとする。

「なんらかの印象がわれわれに現われるようになると、この印象と関係を持つような観念へ心を差し向けるだけでなく、これらの観念に印象を持つ勢いと活気とを伝えもする」（ヒューム、62 ページ）ことを証明するために、先ず1つ目の思考実験として、ここにいない友人の画像について説明している。

今ここにいない友人の画像を見ると、その友人についての観念は類似によって明らかに生気づけられるということ、また、彼の観念が呼び起こす情念は、喜びであれ悲しみであれ、新たな勢いと氣勢を帯びるということである。こうした結果を生じるのには、関係と現在の印象とがともに協力して働いている。もし画像が少しも友人に似ていなければ、あるいはせめて友人を描いたつもりでなかったのならば、思考を友人のほうに向けさせることさえもしないだろう。また、もし画像も本人と同様ここにいなければ、かりに心が画像の思考から本人の思考へ移れるとしたところで、心は友人の観念がその移行によって生気づけられるどころか、むしろ弱められるように感じるだろう。友人の画像が目の前に置かれると、喜びをもってそれを見る。しかし、画像が取り去られると、いずれにせよ、かすかで、はっきりしないのなら、画像で思い出すよりはむしろ直接友人を考えようとするのである。（ヒューム、63～64 ページ）

・・・普通に考えてみて、これは「信念」の問題というより「記憶」の問題ではなからうか？ 画像や写真は、確かに私たちの記憶をより明瞭に保持するのに役立っているように思える。友人の絵と本人との類似の度合いと記憶との因果的關係について説明してはいるが・・・

次に、「隔たり」と観念の勢いとの関係を説明するために、次のような事例を挙げている。

隔たりがすべての観念の勢いを減少させること、逆に、ある対象に近づいてゆくと、その対象自身はまだ感覚機能に現れていなくても、対象が心に作用して直接の印象に似た影響を与えること、これは確かである。このように、ある対象について考えると、すぐに心はその対象と近接しているものへと移されるものである。しかしながら、もっとまさった活気で心に移らせるのは、対象が実際に現れているときだけ

である。私在家から二、三マイルのところにいるときには、二百リーグ（一リーグは約三マイル）隔たったところにいるときよりも、家と関係のあるどんなものでもはるかに親しく感じられるものなのである。なるほど、二百リーグも隔たっている、私の友人や家族の身近にあるなにかを思い起こすと、自然に友人や家族の観念が生じるだろう。しかし、この場合には、心の対象はどちらも観念であり、たしかに両方の観念の間にはなめらかな移行があるとしても、直接の印象が欠けているので、その移行だけでは、観念のどちらにもよりまさった活気を与えることはできないのである。（ヒューム、64 ページ）

・・・これも**対象との距離と記憶の明瞭さとの因果的關係**であって、やはり信念の問題ではない。しかも反例さえ示せてしまう。近くに住んでいたときは当たり前すぎてあまり意識はしていなかったが、遠くに引っ越してみれば、懐かしくて思いが強くなる、ということもありうるように思われるからである。対象が何か、どのようなシチュエーションなのかによって、様々な事例が考えられてしまうのである。

ただ、いずれにせよ、これも記憶の問題であって、信念の説明にはなっていない。この二つの思考実験に基づいて、ヒュームは

因果性が類似と近接というほかの二つの関係と同じ影響力を持つことは、だれも疑うことはできない。（ヒューム、64～65 ページ）

・・・と結論づけているが、全く的外れな説明であることが、これまでの私の分析で明らかになっていると思う。ヒュームはあくまで類似と近接と記憶の明瞭さとの“因果關係”について論じているのである。どうやって因果性と比較しろと言うのであろうか？

ヒュームの思考実験により言えることは、**実物そのものをしばしば見ている方が、記憶がより明瞭になるであろう、ということくらい**なのである。

そもそも、ヒュームは因果推論における信念について検討しているにもかかわらず、「**信念の原因**」（ヒューム、62 ページ）を探ることでそれを説明しようとしてしまっている。「原因」とは何かを明らかにする過程において、それを原因から説明することは循環ではなからうか？

観念、およびこれに伴う信念の正しい本当の原因として考えられうるのは現在の印象である。（ヒューム、65 ページ）

・・・因果關係の「正しさ」をもたらすのは**事実**であって想像ではない、当たり前のことである。実際に観察されたものが因果關係の「正しさ」をもたらすものなのである。もちろん明瞭な記憶はより正確な因果關係の認識をもたらすであろうが、その明瞭さは

信念そのものとは違うものである。

ヒュームは、

信念とは、現在の印象に対する観念の関係から生じる、より活気に満ちた、より強烈な観念を思いいただくことである、と私は結論づける。(ヒューム、66 ページ)

・・・と述べているが、ヒューム自身が思考実験により明らかにしようとしたのは、記憶の明瞭さが何によってもたらされうるのか、という話であって、(因果推論に対する)信念に関しては何も明らかにしていないのである。記憶の明瞭さの問題と信念の問題を取り違えているのだ。

Ⅲ. 印象⇒観念の枠組みだけでは説明できない

ヒュームは推論について以下の三つの場合があると述べている。

推論とは、いかなる種類のものでも、比較すること、つまり、二つ、もしくはそれ以上の対象が互いに他に対して持つ恒常的、もしくは恒常的でない関係を見いだすことにほかならない。ところで、この比較には三つの場合がある。比較される対象がともに感覚機能に現れている場合、どちらも現れていない場合、一方だけが現れている場合、がこれである。(ヒューム、42 ページ)

・・・そして、ヒュームは「感覚機能を越えてたどることができ、見もせず感じもしない存在や事象について知らせる唯一の関係が因果性であることは確かである」(ヒューム、43 ページ)としている。もちろんそういう面もあるが、それだけではなからう。現在現れている事象・現象どうしに因果性があるのかどうか、という推論もありうるのではなからうか。これは「推論と呼ぶよりはむしろ知覚と呼ぶ」(ヒューム、42 ページ)関係であると言えるであろうか？ 関係があるようにも思えるが、本当に関係しているのか確信はない、仮説構築のような場合である。

そのとき、私たちは実際に印象として現れた事象において、事象Aと事象Bとの因果性に信念・確信を抱いているにもかかわらず、事象Aと事象Cとに因果性があるのでは、と言語表現したりイメージしたりすることも(常にかどうかわからないが)可能なのである。

つまり「信念」とは印象⇒観念、という枠組みだけで説明できるものではないのだ。さらに言えば、目の前のものを「リンゴだ」と思えるのに「バナナ」とは思えない、そういう言葉と知覚経験との関連づけにおいても「信念」という問題が生じてくる。「リンゴ」「バナナ」それぞれの言葉を思い浮かべたり喋ったりはできる。しかしその知覚経験に対し、どう考えても「バナナ」とは思えず「リンゴ」であると思ってしまう、そこにあるものと「バナナ」という言葉とを関連づけることが出来ないのである。

このように、信念の問題は、印象⇒観念、という枠組みとは別の事柄なのである。「観念を勢いづけ、生き生きとさせるという効果」（ヒューム、69 ページ）が因果性のみでなく近接や類似の関係によってももたらされることが、「信念は因果性から起こり、一つの対象から他の対象へ推理を行いうるのは、対象がこの因果の関係によって結合される場合に限られる」（ヒューム、69 ページ）ことと相いれないのではないか、という疑問など、そもそも生じようがないのである。

IV. 観念の活気や情感・情念の強さだけでは説明できない

原因と結果の関係に関して、

この関係によって現れる対象は定まっていて、変わることがないのである。すなわち、この場合には、まず、記憶の印象は目立つほどの変化はけっしてない。（ヒューム、71 ページ）

・・・とはいうものの（「記憶の印象」という表現の問題点については別稿で説明したのでここでは触れない）、因果推論において変化がないのは、因果関係を示す「言語表現」の方であり、それに伴う「観念」（記憶は実際には観念、心像、イメージであるはず）は明瞭であったりなかったりするるのである。あるいはイメージが変化することさえありうる。

磁石のN極とS極は引き合う、という時、私たちは常に同じイメージを抱くと言いきれるだろうか？ 磁石にも様々な形がある。あるいは磁石以外のイメージかもしれないのである。肥料をやれば作物はよく育つ、と言うとき、肥料のイメージは人それぞれ違うであろうし、作物として何をイメージするかも人それぞれであろう。

あるいはだいぶ前にはよく経験したが最近は遭遇しないようになった事象など、それを表現する言葉そのものは同じでも、そこからイメージできる観念は、やはり不明瞭になったりすることがあるのではなかろうか。

ヒュームは因果推論における「類似」の効果について言及しているが、それは様々な事象・物・現象を同一の言語で呼ぶのかどうかという、言葉と知覚経験との関連づけの問題なのであり、観念を活性化させるかどうか、という話ではないのだ。

同一性については、(別稿で詳細に論じる予定であるが)『人性論』110～114 ページで詳細に論じられている。変化しているのに同じ物として取り扱われるものがある。ヒュームはそれを「誤りを犯すわれわれの傾向」(ヒューム、111 ページ)としているが、そうではなく、それがまさに同一性というものの一形態なのである。あるいは同じものではないのにその類似性から同一の名辞で呼ばれる、同じ名前と呼ばれる事象・物もある。

さらに、習慣(=恒常的相伴)が観念の「活気」に及ぼす影響に関しても、ヒュームに反する事例が考えられうる。

すべての信念および推論のもとになる習慣が心に作用して活気づけるには、ふたとおりの別々のやり方があることを考えておかねばならない。というのは、第一に、過去のすべての経験において、二つの対象がいつも相伴っていたことをわれわれが知ったとすると、これらの対象の一方が印象として現れれば、明らかに、習慣によって、これにいつも伴う対象の観念へたやすく移行するに違いない。(ヒューム、73 ページ)

・・・たとえば、通勤や通学のときにいつも同じ時刻に同じ場所で出会う人がいるとする。当たり前を考えていたが、あるとき、その人とその時刻にその場所に現われなかったとする。そういう場合、まさにその一度だけの経験の方がより印象(ヒュームの言う印象ではなく、一般的な意味合いでの印象)強く記憶に残るかもしれない。

ある作業において、同じやり方でいつも成功していたのに、ある時突然、失敗してしまった。そういうとき、失敗したことに対し警戒心を抱いて、対策を立てようとするのではなかろうか(私の仕事の漆の作業でもそういうことがある)。

事象の恒常的相伴は、むしろ当たり前のことすぎて、印象を弱めることさえあるかもしれないのである。観念が「たやすく移行する」のだと言えなくもないが、経験の移行がなめらかすぎて、いちいちその都度観念・イメージとして本当に現れているのかどうかも分からない日常的因果認識も多いと思われるのである。

蓋然的な推論はすべて一種の感覚にほかならない。われわれが好みや情感に従わねばならぬのはなにも詩や音楽だけではなく、哲学でもやはりそうなのである。私になんらかの原理に確信をいだくのは、ある観念がより強く私の心を打つからこそである。一連の議論のほうをほかの議論よりも選び取るとき、私はまさしくそれらの議論が与える影響の強さについて私の感じから決めるのである。(ヒューム、66～

・・・後述するが、私も信念に情感・情念（具体的に言えば情動的感覺）が関与しないとは思っていない。しかし、それは私の心を打つ「強さ」であるとは限らないのである。

例えば、そこに4本のスプーンが並べてあるのに「これは3本のスプーンです」と説明がなされていたとする（例えばオノ・ヨーコさんの「THREE SPOONS」のように）。明らかに事実とは異なる言語表現であるのに、いや、異なっているからこそ、そこに何か強く情感を沸き立たせるのである。4本のスプーンが並べてあって「これは4本のスプーンです」と説明したところで、（それが「正しい」と思っているのに）何も感じないであろう。事実と異なる言語表現だからこそ、様々な連想を生み、それが芸術作品になりうるのだとも言える。

「正しい」事実認識よりも、むしろ「間違った」事実認識の方が“強く心を打つ”場合さえあるのだ。つまり情感の「強さ」だけでは、事実認識、因果推論の「正しさ」への信念を説明することはできない、ということになる。

V. 情念は、因果推論の“影響”のみでなく、事実認識を導くものとしても現れる

ヒュームは、信念が観念の「勢いと活気」（より正確にはそういった名辞で説明しきれないある「感じ」）であると説明する一方、（先にも触れたが）信念が情感、情的なものであるとも説明している。

信念はわれわれの本性の知的部分の働きというよりもむしろ情的部分の働きであること（ヒューム、92 ページ）

・・・このあたりヒュームは整合的な説明をしてはいない。ヒューム自身が印象⇒観念の枠組みに固執してしまっているからかもしれない。しかし、私たちの具体的経験においても、**事実認識、因果性の把握における対象、その対象の印象・観念とは別個に、情的な感覚、情動的感覺というものが実際に現れている**のではなからうか。

さらにヒュームは、恒常的相伴（習慣）が信念をもたらすという自らの仮説を自分で覆すような説明をしているのである。

臆病で、すぐに恐れをいだきやすい人は、出会う危険についての説明を聞くといつも、簡単にそれに従ってしまう。また、悲しみがちな、ふさぎこむ気質の人は、心を占めている情念を助長するものはすべて、すぐに軽々しく信じがちである。なにか心を動かす対象が現れると、それが警告を与えて、その対象に固有なかなりの情念をすぐに呼び起こす。生まれつき、その情念に傾きやすい人において、そうである。(ヒューム、77 ページ)

・・・事実認識への信念・確信は、「恒常的關係」のみによってもたらされるのではない、ということなのだ。

この他にも、様々な要因が(因果的に)考えられうる。例えば、誰からその情報を教えてもらったかどうか、ということも影響があるように思える。そこら辺の知らない人が言うことなのか、いつもお世話になっている信頼する人からの情報なのか、専門家の言うことなのか・・・

また、特定の場所やシチュエーションにおいて命の危険を感じるようなことがあったとすれば、恒常的相伴などなくとも強く印象に残り、二度と同じようなことをしようとは思わないのではなかろうか。

このように、因果推論への信念は、ヒュームの言うような単純な話ではないのである。因果的に考えてみれば、恒常的相伴(習慣)のみでなく、その他様々な事情が考えられうるのである。

信念の効果は、単なる観念を印象と等しいものにまで高め、情念に対する影響力の点で印象と似通ったものを観念に与えることにある(ヒューム、77 ページ)

・・・とヒュームは説明しているが、観念の「勢いや活気」を印象に等しいものに高めるのが信念ではなく、印象であれ観念であれ、それが事実として「正しい」と思わせるものが「信念」なのである。つまり印象として現れる知覚的経験を「リンゴだ」と確信すること、シーザーが3月15日に暗殺されたこと、水を飲めば喉の渇きが癒されること、その事実認識に対して「正しい」と確信すること、それこそが「信念」なのである(価値観に対する信念についてはここでは論じていない)。

繰り返しになるが、ここまでの分析で明らかなのは、ヒュームは印象⇒観念、という枠組みに固執するあまり、信念の問題における情念・情動的感覚の位置づけを見誤っている、そのため信念とは何か正確に説明できなかった、ということである。

では、情動的感覚と信念とはいかなる関係にあるのだろうか？

・・・ヒューム自身に迷いがあるように、その「感じ」とは常に同じであるとは限らないのである。事実把握の「正しさ」にまつわる情動は、様々なシチュエーションにおいて異なったものが現れる。ヒュームの“実験”ではこういった様々なシチュエーションを説明できていないのである。

難しい数学問題に取り組んでいて、やっと納得する答えに辿り着いた時のようなスッキリ感のような感覚や、困難を乗り越えてやっと答えにたどり着いた時のような喜びのような感覚もある。

一方、日常的に受け止めている「正しい」事実は、当たり前すぎて情動的感觉を自覚しながら生活してはいない。ただ事実を受け止めて行動しているだけである。コンクリートの橋は人が乗っても壊れることはない。何も考えずただ橋を渡っている。角を曲がれば〇〇さんの家に辿り着く。別にただ淡々と事実を受け止めているだけで、とくにその〇〇さんに特別な感情を抱いていないのであれば、強い情念を感じたりするわけではない。

そして、先に述べたように間違った事実認識に対し、私たちは違和感というか、言葉では完全に説明しきれないような情動的感觉を抱くこともある。自分なりに答えは出した、しかし何か違和感がある（スッキリしない）・・・もう一度問題を解きなおしてみよう、と考えるかもしれない。

とにもかくにも、それらは事実認識の対象となる印象・観念とは別に現れる感覚なのである（情念という別個の印象とでも言おうか）。それらの様々な感覚が私たちを「正しい」と思われる事実認識へ導いていく（しかし客観的に「正しい」と言い切れるわけではないのだが）。そして先に述べたように、恒常的相伴のみがそういった情動的感觉をもたらすとは限らないのである。

話が面倒になってしまうが、一方でそういった情動的感觉さえ意識しないまま「正しい」と思われる事実認識にたどり着くこともありうる。違和感のないまま、あまりに当たり前と思っている日常的な事象などである。

いずれにせよ結果として、他とは考えられず、いやおうなしにそうであると考えざるをえない「答え」というものに辿り着く（「よく分からない」という結論も含めて）。そのものを「リンゴだ」と思っても「バナナだ」とは思えない、手に握っているボールを離せば下には落ちるが上に飛んでいくことはない・・・最終的には自由に改変できない、「*問題の両面を思いだくこと*」（ヒューム、60 ページ）はできても、どちらかしか「正しい」とは思えないという、いやおうなしに辿り着く「答え」なのである。その事実認識に情動的感觉が伴う場合もあれば、とくに感じない場合もある。ただ、それが「正しい」としか思えない事実認識に辿り着くのである。

恒常的相伴がある事例もあればそうでない場合もある。ただ私たちは個人個人において、それぞれが「正しい」と思う事実認識のもと生活しているのだ。

「信念」にはこういった、一律に説明できない様々な過程が関与しているのである。

しかしその時、その過程全般を「信念」と言うのか、辿りつた「答え」のみを「信念」というのか、このあたりやや曖昧に感じられる。この言葉の曖昧さが「信念」に関する分析を面倒なものにしているようにも感じられるのである。

そして、信念にまつわる情動的感觉も様々であることが話をさらにややこしくしているように思える。ヒューム自身、言葉で表現しきれない「感じ」であるとしているが、このあたりの複雑さが明確な説明を妨げていたようにも思える。実際に現れて来る情動的感觉を上手く言葉で言い表すのが難しいことも多いように思われる。

因果推論をした事実が具体的経験としてある。因果推論に対する信念が、(因果的に考えれば)過去の事象の恒常的相伴によりもたらされたと思える場合もあろうし、そうでない場合もある。その時その時における個別的な因果推論という“出来事”を、ただ一つの「理由」「原因」から説明しきることはできない。

そうではなく、そうした因果推論そのものが客観的に・必然的に「正しい」と言えるのであるかどうか、それを確かめるときに、

どんな代数学者あるいは数学者でも、自分の学問に精通していて、なんらかの真理を見いだすとすぐにそれに全面的な確信を持つとか、あるいは単なる蓋然性ではないなにかであると見なすとかするような人はいない。実際は、自分の証明を見返すためにごとに彼の自身は強まってゆく。友人が認めてくれれば、さらにもっと自信は強まる。そして、学界がこぞって同意し賞賛すれば、彼の確信は最も完全なものに高められる。ところで、確信がこのように徐々に増すのは、明らかに、新しく蓋然性が付け加わってゆくことにほかならない。そして、それは過去の経験と観察に照らして、原因と結果の恒常的な結合から引き出されるのである。(ヒューム、89 ページ)

・・・という説明が示しているように、

- ・いつ見ても (試しても) そうである
- ・誰が見ても (試しても) そうである

という事実の積み重ね、蓋然性の付加が必要になるのだ。それが事実認識の客観性であり必然性であると言える。これはまさに科学的なものの見方 (再現性) であると言える。もちろん、そういった意味合いでは、恒常的相伴が事実認識の信念を強めていく、と言うことはできる。

そのプロセスにおいて、自分自身の信念と他者の見解とを突き合わせ、他者の見解によって自らの見解を見直そうとするのか、やはり自分の見解が正しいと思うのか、それ

らは他者の見解の詳細を調べ、関連する情報を見直し、事実として本当にそうなのか再検証することで、自らの信念を再構築していくのである。

しかし、すべての事象において、このような客観性が常に認められるわけではない。日常生活においては、恒常的相伴があるかどうか分からないような因果推論に基づいて行動していることも多いのである。特に自分や他者の気持ちや行為の分析については、因果的解釈に客観性を与えることが困難なことの方がむしろ多いように思われる。

ヒュームは以下のように説明しているが・・・

原因と結果についてのすべての判断が依存する過去の経験は、気づかれぬくらい目立たぬ仕方で心に作用し、ある程度まではわれわれに知られないでいることさえありうる、ということである。(ヒューム、67 ページ)

経験がひそかに作用し、かつて一度も考え及ばなかったとしても、経験が信念および原因と結果の判断を作り出しうることを、当然、承認しなければならない。(ヒューム、67 ページ)

・・・その「原因」と思わしき経験が「印象」として、事実として具体的に現れていない場合において、“ひそかに”作用したなどと断定できるのでしょうか？ これはヒューム自身の見解と齟齬を来していると言えないだろうか？ もちろん推測はできる。しかしそれが本当に「正しい」という根拠を見つけることはできないのである。

さらには、一般的に「正しい」と皆が認めている認識があるにもかかわらず、私は別の事実認識が「正しい」と信じている場合もある。そういう場合も、他者に様々な情報の再分析を呼びかけ、信念を再構築できるかできないか試すことで再検証を試みるしかないであろう。